

令和元年6月11日現在

機関番号：25501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2018

課題番号：18H05700

研究課題名(和文)近代日本の企業経営と企業家ネットワークの機能に関する実証的研究

研究課題名(英文)An Empirical Study on the Function of Corporate Management and Entrepreneurial Network in Modern Japan

研究代表者

三科 仁伸(MISHINA, MASANOBU)

下関市立大学・経済学部・講師

研究者番号：10825152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、伊東要蔵や門野幾之進に関する一次史料の分析から、彼らと慶應義塾出身企業家との経済的交流の実態が明らかになった。富士瓦斯紡績への投資や千代田生命の経営分析により、同窓関係を基盤とする学閥企業家ネットワークの役割を実証的に解明した。また、これらの事例を日本経済の歴史展開の中で相対的に把握するために、当該分野に関する先行研究を幅広く渉猟した。その結果、学閥を準拠集団として把握することで、企業家相互の実際の連帯について、門野幾之進や伊東要蔵、和田豊治といった個別の企業家の活動実態から明らかにできたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が注目した慶應義塾出身者による学閥ネットワークの解明により、経済発展を支えた企業家相互の関係性について、同窓関係に基礎を置く人的ネットワークの重要性を提示した。先行研究が十分には捉えきれていない企業家ネットワークの結合要因の一端を解明したといえる。書簡や帳簿などの一次史料の分析により、具体的な企業家活動や投資行動の検討により、近代日本の企業経営や産業発展が牽引した企業家相互のメカニズムが解明されたといえる。

上記の検討成果は、現今の社会においても十分に機能しえることは想定できることから、近代的経済システムを支える人的ネットワークの有用性を提起するものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, the analysis of the primary sources on Ito Yozo and Ikunoshin Kadono revealed the actual situation of economic exchange between them and entrepreneurs from Keio University. Through the investment in Fuji Gas Spinning and business analysis of Chiyoda Insurance, we clarified the role of the entrepreneur network based on the alumni relationship empirically. In addition, in order to grasp these cases relatively in the historical development of the Japanese economy, we conducted a wide range of prior research in this field.

As a result, it can be said that the actual relationship between the entrepreneurs could be clarified from the actual activities of individual entrepreneurs such as Ikunoshin Kadano, Ito Yozo, and Toyoji Wada by grasping the alumni-entrepreneur network as the reference group.

研究分野：日本経済史

キーワード：経済史 企業家ネットワーク 学閥 地方資産家 慶應義塾 伊東要蔵 門野幾之進

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

政治及び経済体制の都市部（東京）への一極集中が批判される現代に比して、明治・大正期の日本は、地方分権的な色彩を強く帯びた社会であった。半世紀以上に及ぶ日本経済史の研究史は、産業革命期や企業勃興期の経済について、中央からの人的・資金的な影響力を認めながらも、地方からの主体的な活動の重要性を繰り返し主張している。このことは、都市部の財閥を中心とした巨大資本の存在を前提としつつも、地方の企業家や資産家の活動に、日本近代化の要因を見出そうとするものと解釈できる。こうした見解は、現代の日本社会が抱える問題とも通底している。人口減少が喧伝される 21 世紀の日本社会にとって、中央と地方の関係は大きな転換を強いられているといえることから、その関係性及び歴史的前提について、マクロ的な経済分析を前提としつつも、個々の企業家自身の内面にまで踏み込んだ歴史的な分析が不可欠であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代日本の企業勃興について、同窓関係に基づく学閥企業家ネットワークが、産業革命期に経営資金の調達や株式の募集、必要な人材の確保を行う上で、どのような役割を果たしたのかを明らかにすることである。従来までの産業革命期の日本経済に関する通説では、都市部の巨大資本と地方企業家の活動は対立的に叙述されてきたが、両者は相互補完的な関係を有するとする立場から、産業革命期の日本経済を再検討することを課題とする。本研究では、慶應義塾出身の企業家集団、特に和田豊治や浜口吉右衛門を中心としたネットワークを検討対象とすることとし、富士瓦斯紡績や千代田生命を検討事例として、学閥企業家ネットワークの機能を明らかにする。総じて、近代日本の企業経営の鍵を握る企業家集団の経済活動を分析することを通して、中央と地方の関係について、従来の研究史とは異なる視点から、相互補完的な関係性を明確に打ち出すものである。

3. 研究の方法

歴史学方法に依拠した一次史料の分析が中心である。具体的には、門野幾之進記念館（三重県）、国立国会図書館、慶應義塾福沢研究センターでの史料調査を行った。

門野幾之進記念館では、本務校の学生をアルバイトとして雇用し、現在確認できる全ての書簡史料の写真撮影を行い、体系的な分析をおこなった。また、慶應義塾福沢研究センターでは、伊東要蔵家旧蔵史料を中心として、関連する企業家に関わる史料調査を行った。

さらに、関連する新聞や雑誌などの二次資料の検討や日本経済史のみならず、関連する周辺領域などの研究文献を渉猟した。

4. 研究成果

慶應義塾福沢研究センターでは、現在、整理作業中である伊東要蔵家

門野幾之進記念館に所蔵されている文書の多くは、門野家内部での私信が中心であった。しかし、断片的記述ながら、慶應義塾出身企業らとの経済的交流を示すものも含まれていた。こうした一次史料の分析は、国立国会図書館等での新聞や雑誌等の調査と並行しておこなった。

ここで、本研究によって明らかになった成果を、これまでの研究成果の蓄積を踏まえて述べる。

本研究が検討事例として着目した門野幾之進は、北川禮弼らとともに千代田生命保険を設立する際に、三井の関係者や慶應義塾出身の企業家らによる支援を受けていた。彼らは基金の拠出に依るとともに、評議委員に就任した。また、門野幾之進は堅実第一の経営姿勢を堅守し、特に厳格な資産運用を行っており、同業他社に比して、資産運用に占める有価証券の割合は低かったといえる。また、門野幾之進は、千代田生命保険の傍系企業として千代田火災保険や千歳火災海上再保険、第一機関汽缶保険を設立するとともに、請われて日本徴兵保険の設立にも関与して。これらの企業の経営においても、千代田生命保険のそれと同一の方針を採用していた。さらに、自らの保険事業を支援した慶應義塾出身の企業家との関係から、豊国銀行の監査役として貸出審査体制を構築するとともに、千代田生命保険を通して玉川電気鉄道の経営を後援していた。

また、慶應義塾出身の企業家である伊東要蔵には、彼が企業経営に関わる場合には、二つに企業家ネットワークが存在していたといえる。すなわち、浜松地域を中心とした鉄道や瓦斯に代表されるインフラ事業と、和田豊治や浜口吉右衛門が関係した事業である。この内、後者に位置づけられる富士瓦斯紡績や豊国銀行は、慶應義塾出身の企業家が多数参画しており、こうした状況を背景として伊東要蔵も経営に携わることになったと考えられる。これまでの日本経済史研究が戦前期日本の地方経済の発展を「上からの資本主義化」若しくは「下からの資本主義化」の一方に依拠した議論が中心であったことに留意するならば、伊東要蔵の経済活動とはその双方の性格を有するものであったと評価できよう。彼自身が浜松出身の有力な地方資産家であることに加えて、慶應義塾出身であったことが、こうした二重の属性を備えるに至った所以であろう。また、伊東要蔵の有価証券投資の実態を分析した結果、鉄道事業や金融事業、紡績

事業を中心に投資活動が行われていたことが明らかになっている。ここには、門野幾之進が関わる企業も含まれている。特に自身が経営に携わる企業と和田豊治が関連する企業に投資が集中しており、その結果として、双方の性格を有する富士瓦斯紡績及びその関連企業には多額の出資が行われた。また、静岡県外の企業に対する投資比重が大きいことから、当該時期における投資活動は、地方名望家的なそれとは異なるものであった。

また、これら史料の分析結果を、日本経済の歴史展開の中で相対的に把握するために、当該分野に関する先行研究を幅広く渉猟した。その結果、企業経営や資金調達における企業家ネットワークの役割については言及されつつも、その内部における実体的な役割については十分に検討が進められていないことが改めて確認された。本研究によって明らかにされた慶應義塾出身者を中心とした学閥企業家集団の存在は、近代日本の経済発展を支えたネットワークの内部的機能を実証的に解明できる事例であるといえる。即ち、学閥を準拠集団として把握することで、企業家相互の実際的連帯について、門野幾之進や伊東要蔵、和田豊治といった個別の企業家の活動実態から明らかにできたといえる。

5. 主な発表論文等

研究成果を、以下の学会の自由論題報告で発表予定であり、その後、その内容を論文化する計画である。

〔雑誌論文〕(計 1 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

三科仁伸「近代日本の学閥企業家集団 伊東要蔵とその周辺」, 三田史学会 2019 年度大会

〔図書〕(計 1 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。